

2018年2月15日

四国西予ジオパーク推進協議会
会長 管家 一夫 様

日本ジオパーク委員会
委員長 尾池 和夫



第32回日本ジオパーク委員会審査結果報告書

2017年12月22日に行われた第32回日本ジオパーク委員会において、貴地域は日本ジオパークに再認定されました。その審議の過程での貴地域に対する委員会からの意見をまとめて、ここに報告いたします。

【総評】

四国西予ジオパークは、2013年に日本ジオパークの認定を受けて、今回が1回目の再認定審査である。ガイド窓口の一本化、景観条例の制定、認定ブランド、学校教育、地域のデザイナーを登用したブランド戦略、サイクルツーリズム、四国西予ジオミュージックなど、多くの先進的な取り組みが行われている。また、ボトムアップを重視した組織の改編、手上げ方式の地域への補助金制度など、住民主体の活動を促進する仕組みについて、高く評価できる。一方で、ジオパークを地域全体で推進する柱となるジオパークのテーマとストーリーについて、地域の関係者との共有が進んでおらず、また事務局主体で進めている事業や、ガイドの有り方等について、住民の理解に差があることから、事務局と、地域住民やガイドとの間で、コミュニケーションが不足している状況も見受けられた。

上記の課題が見られるものの、全体的には、認定時の指摘事項について一定の改善が確認できた。またジオパークを活用して地域の新たな価値を創り出すための、多くの実践と成果が確認できた。以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

【優れている点】

- 西予市景観条例、地区景観計画を策定するなど法的規制や関係者との連携強化を通して、ジオパークの地形、地質遺産の保全に積極的に取り組んでいる。
- サイン整備計画、ブランディング戦略を策定するとともに、地域のデザイナーを登用してデザイン的に水準の高い広報媒体やサイン等が作られている。
- インフォメーション施設である道の駅どんぶり館が、ジオパークにちなんだ食事メニューの販売や展示室の新設を進めるなど、強力なパートナーとして活動している。
- ジオパークの特色を活かした教育活動を展開する西予市教育大綱を定め、それに基づき、市内の小中学校で熱心なジオパーク学習が展開されている。
- ジオパークのために行動する覚悟がある人を集めた住民主体の部会を再編成し、活発な議論の中から「四国西予ジオの至宝」の仕組みが生まれるなどの成果を上げている。
- 四国西予ジオパークを推進する民間団体として、一般社団法人SGS (Seiyo Geo Service) (以下、

SGS)が設立され、市からジオパークに関する窓口業務を委託。土日祝日を含むジオツーリズムに関する受入窓口の一本化が行われている。

- 四国西予ジオガイドネットワークや各地域のガイド団体が、それぞれの地域の特性を生かした熱心な活動を進めている。自らの企画をプレゼンテーションすることで、市の交付金が得られる手上げ式の交付金制度がこれらの団体の活動を支援している。

【今後の課題、改善すべき点】

1. 緊急に解決すべき課題（おおむね1年以内）

（ジオストーリーとジオツーリズムについて）

- ジオパークを地域全体で推進する柱となるジオパークのテーマとストーリーについて、関係者との共有が進んでいないことが四国西予ジオパークの最も大きな課題である。「多様性」を特徴とする本地域において、このストーリーが、全域に分散したさまざまなジオパークの見どころを束ねる役割があるが、それが共有できていないため、看板、パンフレット、教育、ツーリズム、ガイド活動など、ジオパークの様々な活動に影響を与えている。早急に事務局が準備した草案を多くの関係者の間で共有し、それをたたき台とした議論を行い、住民とともに本地域ならではの分かりやすいストーリーをまとめ上げる必要がある。これについては、認定時の審査でも指摘されていた事項であり、早急かつ確実に対応していただく必要がある。そのため、ストーリー構築については早急に対応を行うとともに、そのプロセスと結果を日本地球惑星科学連合大会や日本ジオパーク全国大会などの場でジオパークの関係者に対して積極的に発信し、ジオパークのネットワークを活用した改善を続けていく必要がある。現地審査員が今後もサポートできるので、相談していただきたい。なお、このストーリーはサイトに限らず、将来的には地域の景観、農水産物、無形文化遺産など、様々な事柄に展開して検討していただきたい。
- 専門用語の多用は、ジオパークのガイドが「してはならないこと」と、徹底する必要がある。語り中心のガイドではなく、五感で感じる体験的要素や、疑問や気づきを促すインタープリテーションの手法などを取り入れ、利用者の年齢や興味に合わせて、さまざまな楽しませ方が提供できるツアーをめざしていただきたい。

2. できるだけ早く解決すべき課題（おおむね2年以内）

（運営体制について）

- 協議会事務局はすべての関係者を結びつける重要な存在であり、数年単位または審査が終わるたびに事務局員体制が入れ替わり、蓄積されたノウハウや人間関係を失う事のないよう、長期的視点で人員配置するとともに、事務局員数の充実も検討していただきたい。地球科学やジオパーク活動に関連する分野の専門家でもある専門員に関しては、期限のない雇用が実現できるよう、積極的に取り組んでいただきたい。また、多分野にまたがるストーリーを科学的に確認することができる各方面の専門家との持続的な協力が受けられる体制を構築していただきたい。

（教育、研究について）

- 新たに整備される予定の拠点施設である四国西予ジオミュージアム（仮称）の計画の中では研究に関する明確な位置付けが確認できなかった。この拠点施設や配置される人材を活用した研究のビジョンを作成していただきたい。また、新設のジオミュージアムには、学芸員など専門的なス

スタッフを配置するとともに、生態系や文化に関する研究や情報の集積も積極的に進めていただきたい。

- 現在行われている優れたジオパーク教育について、より多くの地域の学校に実践を拡げるとともに、経験豊富な教員が移動した場合でも学習プログラムが続けられるよう、持続的な手法を構築していただきたい。協議会は今後もそのための支援を行っていただきたい。

(ガイド制度について)

- 新たなガイド認定制度について、多くの認定者を誕生させることに捉われず、少数でも、ガイドに求められる具体的な基準をクリアできた方のみが認定される仕組みとしていただきたい。特に、熱中症・スズメバチなどの対策や救護技術も含め、来訪者の安全管理について、地域による差が出ないようにガイドマニュアルを共有していただきたい。審査/選考に際しては、協議会内部で行うのではなく、信頼が伴うように専門家やプロガイドを加えた審査チームを立ち上げ、実施していただきたい。
- ガイドの技術や知識を継続的に更新、研鑽するとともに、各地域で活動するガイドの連携が可能となるような仕組みを考えていただきたい。

(ジオツーリズムについて)

- ツアーや、ガイドのコーディネートについて、SGS や新たな協力者による民間の関与を高めるとともに、各地域のガイド団体との一体感の醸成に努めていただきたい。
- タクシーを利用したサイト巡りについて、ジオパークのホームページで紹介するなど連携を強め、四国西予ジオパークへの個人、団体の訪問者が様々な交通手段でジオパークを容易に楽しむことができるよう努めていただきたい。
- 移動距離が長いという難しさもあるが、各地域内でツアーが終わらないよう、ジオパーク内の多様性を感じられるようなツアーを工夫していただきたい。
- ホームページやパンフレット、外国人観光客が多く訪れるサイトの看板などについて、多国語対応を進めていただきたい。

(ネットワーク活動について)

- 四国西予ジオパークの先駆的試みや教育活動の優れた事例等がジオパークのネットワークの中で十分に共有されているとはいいがたい。こうした事例をこれまで以上に積極的に発信し、他の多くの地域と共有することに貢献していただきたい。

(拠点施設について)

- 拠点施設はガイダンス施設や研究施設としての機能を持たせるだけでなく、ガイドや訪問者が集まりコミュニケーションを図ることが可能な施設となるように整備を進めていただきたい。

(西予市ジオパーク推進アドバイザーについて)

- ジオパーク担当から職員が外れた場合にも、ジオパーク推進に必要な知識や経験を生かすことができるように創設された制度であるが、どの程度の関与が可能なのか、業務としてどの程度主体的にかかわることが可能なかが明瞭ではなかった。本制度に任命された職員がどのようにジオパークに関わることができるのかについて明確にしてほしい。

(「四国西予ジオパーク遺産」の名称について)

- 現状で、サイトから外され「四国西予ジオパーク遺産」に分類されたものについても、全て地形・地質サイト、自然(生態)サイト、文化サイトのいずれかに分類可能なものである。サイトと遺

産の持つ意味にも留意する必要があるため、「四国西予ジオパーク遺産」という新たな分類を増やすことによって混乱が生じる可能性があり、本分類は採用すべきではない。保護・保全の専門家やネットワークを活用して様々な意見を参照しながら、分類を再検討していただきたい。

3. 解決すべき課題（3、4年先を視野に）

（サイトの拡充、保全、安全管理について）

○地質・地形サイトに偏重している現在のリストに、自然（生態系）サイト、文化サイトを新たに追加するなど、圏域内の多様なサイトに価値を見出し、地域資産の取り込みを進めていただきたい。また、各サイトの保全方法や、来訪者の安全対策法を具体化していただきたい。

（有形/無形文化遺産について）

○西南四国最古の前方後円墳である笠置峠古墳をはじめ、宇和盆地に点在する古墳群、石灰岩地帯と強く関係して四国西予ジオパーク内に分布が集中する洞穴・岩陰遺跡などについて、本地域における重要なサイトであり、さらなる活用を進めていただきたい。また洞窟内生態系のかく乱などが問題と考えられるため、調査研究を進めるとともに、洞窟内の照度や照光時間などに配慮する必要がある。さらに、先史時代遺跡だけでなく近代化遺産でもある石灰窯群などさらに多くの地域の遺産についても総合的に活用していただきたい。

○この地域でこれほど多様な、伝統的な祭事、習俗などが育まれた背景には、地域の地形や気候などの関与が考えられる。無形文化遺産と四国西予ジオパークとのかかわりが感じられるよう、新たなテーマに基づいたジオパークのストーリー展開による情報提供を行っていただきたい。教育やツーリズムの中で積極的に紹介することで、ジオパークがこれらの無形文化遺産の保護と持続性を支援できるような活動を行っていただきたい。

（可視性について）

○今後設置、製作する看板、パンフレット等には新たなテーマ、ストーリーに基づいた内容を表示し四国西予ジオパーク全体の魅力が伝わりやすい内容に改善を行っていただきたい。また鉄道を利用する来訪者に対しても、ここがジオパークであることが分かる表示や、マップ・パンフレット等が入手できる方策を検討していただきたい。さらに、既存の公共施設や博物館（相当施設含む）・資料館などについても、地質・地形を紹介する施設だけでなくジオパーク活動と関連のある施設には本地域のロゴマークを掲示するなど可視性をさらに高めていただきたい。

（施設との連携について）

○市内には、西予市朝立会館（朝日文楽）、明浜歴史民俗資料館（資料館）、宇和米博物館（資料館）、野村シルク博物館（資料館）、道の駅きなはいや（物産）など、多くの施設が存在する。これらの施設との連携を強化するとともに、ジオパークのロゴを増やすなど可視性を高めていただきたい。また、県立歴史文化博物館ではより幅広い分野の学芸員との連携を進めていただきたい。

（地元コミュニティの全面的かつ効果的な参加について）

○人口の集中する宇和盆地を中心とした旧宇和町での住民の関心や関与がやや低いように見受けられた。こうした状況は他のジオパークでも見られる状況であるが、四国西予ジオパークでは卯之町の町並みガイドなどすでに本地域でガイド活動を行っている団体も存在する。地形地質と関連する文化や歴史も多く残る地域でもあるので、こうした地域の資産を生かしたジオパーク活動への参加の広がりを進めていただきたい。

以上で指摘した点や現地審査で指摘された問題点も含め、今後どのように改善するか、人や予算の裏付けとスケジュールを明記したアクションプランの形で、今年度中に日本ジオパーク委員会に報告してください。このアクションプランの進捗については4年後の再審査の際の審査対象とします。